



Title	全部床義歯の人工歯材料が口腔関連QOLに与える影響の検討：非盲検ランダム化比較試験 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	古玉, 明日香
Citation	北海道大学. 博士(歯学) 甲第14996号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85190
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Asuka_Kodama_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（歯学） 氏 古玉 明日香

主査 教授 横山 敦郎
審査担当者 副査 教授 山口 泰彦
副査 教授 吉田 靖弘

学位論文題名

全部床義歯の人工歯材料が口腔関連 QOL に与える影響の検討
：非盲検ランダム化比較試験

審査は、主査、副査を含めて公聴会として行われ、論文提出者が論文内容の要旨を説明した。その後、内容について審査担当者が質問し、論文提出者が回答する形で進められた。以下に論文内容と審査の要旨を述べる。

全部床義歯の既製人工歯として、レジン歯、硬質レジン歯および陶歯が使用されている。レジン歯は咬耗しやすいことから、強度を向上させるためにフィラーを含有したコンポジットレジンを用いた硬質レジン歯が開発され、耐摩耗性と審美性、さらには咬合調整などの臨床的な操作性が改善された。陶歯は、耐摩耗性に加えて、審美的であり、衛生的なことから、その有効性は高いと考えられるが、調整や排列のしやすさなどから、現在は硬質レジン歯が最も多く使用されている。しかし、人工歯材料について臨床効果を比較検討した報告はない。本研究の目的は、全部床義歯の人工歯材料の違いが無歯顎患者の口腔関連QOLと患者の満足度および咀嚼機能に与える影響について比較・検討することである。

対象者は、北海道大学病院義歯補綴科に通院中で、上下顎全部床義歯の新製が必要な患者とした。本研究では、硬質レジン歯としてベラシアSA（株式会社松風、京都）を、陶歯としてベラシアSAポーセレン（株式会社松風、京都）を選択し、患者をランダムに割付けた。評価項目は、口腔関連QOL（Japanese version Oral Health Impact Profile for assessing edentulous subjects: OHIP-EDENT-J）、満足度（Visual Analog Scale: VAS）および咀嚼能率とした。各評価項目の測定は、新義歯製作前（以下、BL）、新製した義歯装着後3か月（以下、3M）、義歯装着後6か月（以下、6M）および義歯装着後12か月（以下、12M）に行った。主要評価項目をOHIP-EDENT-Jスコアとし、陶歯と硬質レジン歯の3Mでの結果をWilcoxonの順位和検定にて比較した。満足度および咀嚼能率の評価項目に関し

でも3Mでの人工歯材料の違いによる検討を行った。各評価項目のBL, 3M, 6M, 12Mの結果について陶歯と硬質レジン歯の比較を行った。統計解析はWilcoxonの順位和検定を用いた。また、陶歯および硬質レジン歯それぞれについて、各時点間の比較を行った。統計解析は、Wilcoxon符号付順位検定を用いた。

主要評価項目である3Mにおける陶歯と硬質レジン歯のOHIP-EDENT-Jスコアに、有意差は認められなかった。硬質レジン歯を使用した義歯を装着することにより、口腔関連QOLが改善することが示された。また、すべての評価項目と各時点において、VASを用いた総合的な満足度の6Mで有意差($p=0.040$)を認めたが、他の各評価項目の各時点において有意差は認められなかった。

本研究は、人工歯材料についてランダム化し、さらに硬質レジン歯と陶歯の形態が同一の製品を使用していることから、各群の違いは人工歯の材質のみであると考えられる。陶歯と硬質レジン歯では、硬度、耐摩耗性、透明性(審美性)、吸水性が異なるが、本研究において、統計学的に有意な差は認められなかった。

以上から、義歯装着後3か月時点での口腔関連QOLについては、人工歯材質の違いによる臨床的に意義のある差はない可能性が示された。また、義歯装着後3か月という比較的短期間での総合的な満足度および審美性に関する満足度は、新しい全部床義歯の装着により改善するが、人工歯材料の種類には影響されないことが示された。

公聴会における質問は以下の通りであった。

1. 対象者の除外基準について
2. サンプル数の決定方法について
3. 脱落者が多い理由について
4. 義歯の製作方法について
5. データの分布について
6. データの解析方法と妥当性、ならびに考察について

以上の主査ならびに副査からの質問に対して、学位申請者は十分な説明とともに、明確な回答を行った。加えて、今後の研究の継続と展開について抱負を説明した。

本研究において、学位申請者は、全部床義歯の人工歯材料が口腔関連QOLに与える影響について非盲検ランダム化比較試験を行い、義歯装着後3か月時点での口腔関連QOLについては、人工歯材質(陶歯と硬質レジン歯)の違いによる臨床的に意義のある差はない可能性を示した。その研究内容は高く評価され、よって学位申請者は博士(歯学)の学位授与に値するものと判定した。